中国香港の学校英語教育

―英語科教員対象の英語能力試験と参与観察から―

大和　洋子

要旨

香港は2001年より、初等・中等教育段階の語学（英語・中国語）科を担当する教員に対して、教員としての語学力を測定するベンチマーク試験を導入した。本稿は、英語科教員用のベンチマーク試験導入の背景を確認するとともに、ベンチマーク試験そのものから分析できる香港の英語教員に求められる語学力を探る。また、現地の中等教育学校における授業の参与観察から、教育現場で英語科教員がどのような授業展開をしているのかを概観し、香港の中等教育課程で生徒につけたい英語力とは何かを考察する。香港における英語科教育は、現在日本で推奨されている Teach English in English　及びコミュニカティブアプローチ に通じるところがあり、日本の英語科教員養成課程への示唆に富むものである。

Ⅰ　はじめに

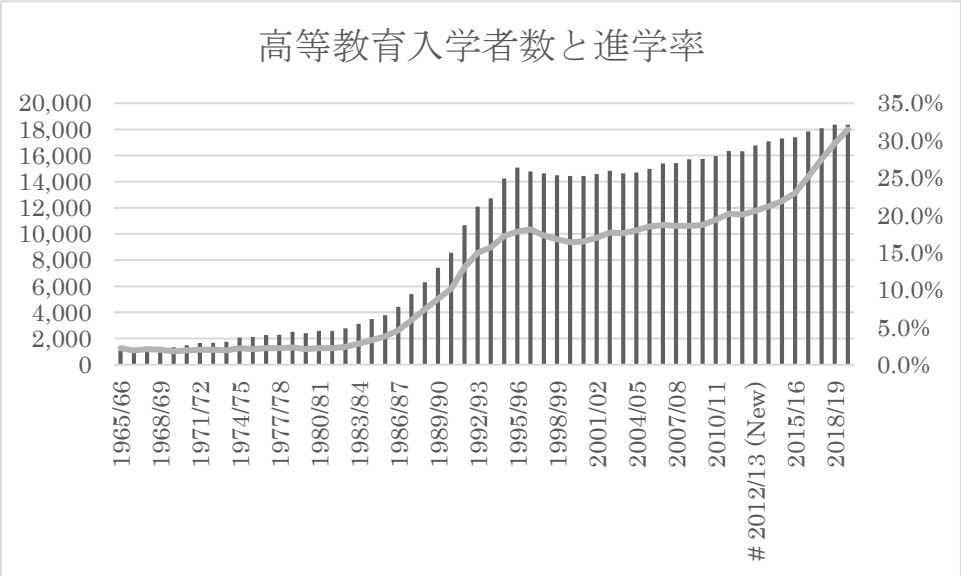
１．英語科教員対象の英語力試験導入の背景

教員の英語力試験導入の背景として、返還前の学校教育制度から説明する必要がある。英国領香港は長年にわたり英語のみが公用語であり、中国語も公用語として認定されたのは「1974年法定語文条例」が通過した1974年である。しかし、公用語と言っても公文書は英語のみで、法的に英語と中国語（香港で使われる繁体字使用）の二言語で公文書が作成されるようになったのは、二言語条例が布かれた1989年である[1]。高等教育は長らく当該年齢層の2%前後の受け入れ枠しかなく、教授言語も英語で超エリート教育だった。1990年代に入り高等教育の拡大とともに受け入れ枠も徐々に広がりを見せた（図１）。しかし、高等教育は原則英語が教授用語であり、高い英語力が必要なため、中等教育段階での学校教科書は、中国関連科目以外は全て英語で編纂されたものであった[2]。そのような状況下、約９割に当たる中等教育校が自称アングロ・チャイニーズ校と名乗り[3]、英語による教育校であることをアピールしていた。実際には多くのアングロ・チャイニーズ校は、母語である広東語と学習言語の英語とのミックスコードによる教授を行っており、香港政庁はこのミックスコードによる教授法では、教育内容の習得も語学習得も思うように効果があがら

ないと、再三にわたり母語による教育を学校に求めてきた。しかし、親からの要望と学校側の経営戦略[4]から、政庁からの勧告は長年無視されてきたのである。

母語教育政策とは、中等教育段階において、教授言語を母語である広東語にするという政策である。約 4 分の 1 の学校に当たる 114 校（English Medium of Instruction: EMI 校）以外は教授言語を語学以外は母語に徹底させる（Chinese Medium of Instruction: CMI 校）もので、返還翌年の 1998 年 9 月の新学年開始時から実施された。英語教育の観点からは一見逆説的な印象を与えるが、教育の質向上を狙った政策である。出版社もこれに伴い教科書は英語版と中国語版を用意している。CMI 校の指定には生徒や親からの強い抗議があったが、CMI 校にはネイティブ英語教師（Native English-speaking Teacher: NET）の加配分、英語教師の増員と、CMI 校に対し数々の優遇策をとり政策を断行した[5]。その後、母語教育政策は一定の効果を得られたと結論付けられ、2009 年以降、母語による教授校に指定された中等教育校においても、教科・クラスごとに一定の基準をクリアしていれば英語による教授が認められ、母語による教授（CMI）校と英語による教授（EMI）校のラベリングが廃止されている[6]。

図 1 高等教育進学者数と入学率（大学教育資助委員会統計資料）



注 1 ：左は UGC 助成による大学入学者数(棒グラフ)、右は当該年齢における香港の公立大学への入学者の割合（折れ線グラフ）。

注 2：2012/2013 は旧制度上の入学者と新制度上の入学者が同時入学した年であるが、グラフは新制度上の入学者のみを表す。

出典：大学教育資助委員会（UGC）による統計資料から筆者作成

この母語教育政策導入時に課題として挙がったのが、教員の語学力である。当時の現職教員の中には英語科専攻の学位を持たずに英語科教員になっているケースが少なからずあったからであり、あくまでも教員の資質を高めることを目的として導入の検討がなされた。合格基準に達していなくても解雇はしないという約束のもと、現職教員の強い反対を押し切り、教育局は 2001 年にベンチマーク試験の導入に踏み切った。資格試験ではなく、ベンチマークとしての導入ではあったが、現職の英語科教員は 2005 年までに合格点をとるか、所定の研修コースに参加することが義務付けられた。同時に新採用の教員は、ベンチマーク試験で合格点を取ることが義務付けられている。この語学教員対象の試験は、教育局と香港考試及評核局（Hong Kong Examinations and Assessment Authority: HKEAA、以下 HKEAA とする）の共同開発である。HKEAA は香港のあらゆる公的試験の問題作成、採点、結果分析を担う政府の教育系独立組織である。

Ⅱ　語学教員の語学力ベンチマーク試験：LPAT

ベンチマーク試験の原語は、Language Proficiency Assessment for Teachers: 略称 LPAT で、英語科と中国語（標準中国語の「普通話」）科の語学教員用がある。本考察では英語科の LPAT English（以下、LPATE とする）に限定して論じる。

英語の語学力を測定するための国際的な試験には、Test of English as a Foreign Language: TOEFL、Test of English for International Communication: TOEIC（共にアメリカ Educational Testing Service: ETS による運営）、International English Language Testing System: IELTS（英国 Cambridge Examination Syndicate, British Council, IDP Education による共同開発運営）などがあり、香港でも受験者は多い。既に国際的認知度が高い試験があるにもかかわらず、なぜ教員用の語学力試験を開発しているのか。それは試験の構成を見れば明らかである[7]。

1. 英語科教員に求められるスピーキング能力

語学の 4 技能：Reading, Writing, Listening, Speaking を総合的にチェックする試験であるが、Speaking は Part1 と Part 2 に分かれ、Part 1 はさらに A と B に細分化される。Part 1A は音読の試験である。教室でモデルリーディングを行うことを想定しての試験であろう。300 words 前後の文章を 10 分の準備時間の後、3 分間音読（評価時間 5 分）する。発音、ストレス、イントネーションを主にチェックされる。HKEAA によれば、これまでの多くの受験者に見られる問題点は、ストレスとイントネーションであり、文字情報も提供されるアナウンサーなどのモデルとなる音源を使って音読の練習をすることを受験者に勧めている。なお、2010 年版ガイドブックに掲載されている Speaking Part 1 A の音

読参考試験問題は、村上春樹の「かえるくん、東京を救う」の英語版からの抜粋で、これは会話文のある文学作品である。Part 1B は簡単な質問に対する口頭回答であり、試験時間は約 3 分となっている。問いは、例えば 'Who was your favourite teacher when you were at school? Explain why.'といったオープンエンドの問いで試験時間は 3 分である。

Part 2 はグループディスカッションで、実際の学校現場において実際に起こりそうな課題が与えられ、それを会場で初めて会う 3, 4 人からなるグループで話し合う。グループ内で各自準備時間が 5 分与えられ、10 分間にわたり、学校の同僚という設定のもとで、与えられた課題の話し合いを行う設定である。準備時間中に各自メモを取ることはできるが、その間に発表原稿を作成することや、グループ内で話し合うことは禁じられている。10 分間の話し合いでは、同僚の意見を聞きそれに応える形で意見を出し合うことが求められ、グループとしての結論をまとめることも、受験者の誰かがディスカッションを仕切ることも禁止されている。 なお、2010 年版のガイドブックにある課題例は、学校長から英語科教員宛に出された「英語スピーチ大会」に関する以下のようなメール文である。

From: Mr Chan Tai Man, School Principal
To: All members of the English Panel
Subject: English Speech Festival

This year's English Speech Festival is coming up and I would like to see the school do well this year. Last year we did rather poorly, with just one student getting into the top three.

Please look into how we might encourage more students to join the Festival and what measures we need to take to ensure that they do well.

出典：LPATE Handbook 2010, p.77

以上、スピーキングパートだけを見ても、英語科教員に求められるスピーキング力がよくわかる。国際的な語学力検定試験は、あくまでも受験者の英語力を測るものであるため、特に英語教員に求められる能力を測る要素はない。音読を重視している点、グループディスカッションで同僚と協働する活動を試験に入れていることは、実は新教育課程で生徒が受ける試験と関連している。新教育制度に伴った新教育課程の教科内容、及び卒業時に原則全員の受験が求められる中等教育修了試験[8]（以降、証書試験とする）で生徒が試される能力と、教員が受けるこの試験は出題形式が同じなのである。生徒が受験する証書試験で

は、必修科目の英語と中国語にスピーキングがあり、生徒も同様に音読とグループディスカッションが課される。この時グループを組むのは試験日に初めて出会う他校の生徒である。教える生徒と同じ形式の試験を教員自身が体験していることになる。

2. ライティング部門の特徴

(Writing Part2 問題の例　資料)

It was a nightmare. I still remember that night – (1) it is very scarily and horror and it is very unforgettable for me. (2) On that night I was playing TV game in home. Suddenly (3) I seed many people screamed on the street. (4) A bigger monster was appear and had been destroying the city. (5) There had a lot of police discussing about what was it and what to do. And I came out the street and see what happen was it. Oh no! A bigger monster was come to the city. And (6) it's outlook was horrified. It has three heads and six arms, and many terrific hair. I can see the city was on fire, and I can hear (7) screamings, that moment was like end of the world. Next the police were use laser guns to fire the robot, and (8) many buildings were collapsed. (9) Suddenly, the street like a dead zone. (10) The dead silence let us scared. I remember (11) to feel very frightened. And the robot was hurt. It was in chaos very scary. (12) Totally four men was hurt. Also the peoples were very helpless. And some people ran to (13) the protective dome, very dark and crowded. And some peoples were scream of help. The protective dome just like a hell. In protective dome (14) some people were cry, shout and scream, it was very scary. Suddenly we listened a good news. (15) The robot was run out of energy, we were safe – no danger any more. (16) If we left the protective dome, we were very happy. (17) At last, the city explained to the people that the malfunctioned robot was a product of the Artificial Intelligence Council. (18) I wish this will not happen again.	*(1)* ***it was very scary*** Now provide corrections for Items 2-10. Write them in the Answer Book.

出典：LPATE Handbook 2010, p.33

Speaking と同様に教員用試験ならではのテスト項目が Writing である。パート 1 とパート 2 の 2 種類のテスト項目があり、パート 1 のエッセイライティングは他の国際的試験と大きく変わらないが、筆者自身の主観では、評価基準はかなり厳しい感がある。学校現場でよくありそうな話題文（教育問題とは限らない）が与えられ、それに対し 400 words 前後のエッセイを書く課題である。点数法ではなく、1 から 5 までの 0.5 ポイント刻みのスケール（段階）評価であり、3 以上が合格基準である。パート 2 は、生徒の 300 words 前後のエッセイを添削する課題である（前ページ資料を参照）。これは内容の添削ではなく、主に文法的チェックである。前半部分のパート 1 は、間違いを直した正しい文に書き換える問題であるが、間違いの含まれる文は指定されているので、その文中の間違いや問題点を正しく書き直せばよい。パート 2 は、生徒のエッセイの後半部分の間違いがある箇所が指摘されているのだが､その間違いを文法的に説明する文章が穴あき文となっている。その穴あき部分を適切な語彙で埋める問題である。なぜそれが間違いなのかを説明を加えて添削するという、まさに教員に求められる英語力である。

では実際に、ガイドブックにある資料（前ページ）を使って実際に教員になったつもりで添削してみよう。生徒の作品とされるエッセイ中、2）～10）の問題個所を含む文を正しい文に書き直す（1 は回答例）。1 文の中に間違いが複数含まれる場合もある。香港の生徒によくある間違いは、日本の生徒の文法上の間違いのパターンに相似性があることが分かる。後半の 11）～18）は、間違いを指摘する文章が穴あきになっているので、空いた部分に適切な語彙をいれて文を完成させるものだが、文法用語を知らないと穴を埋められない。参考までに、16）番目の文の間違いを指摘する穴あき問題文をここに掲載する。多岐選択問題では答えが当たることもあるが、この問題形式では確かな語学力と、文法用語を用いて適切に説明できる指導力がないと答えられない。教員用試験ならではのライティング課題である。

Item 16: If we left the protective dome

The problem is with the wrong use of the (a) _____ "If", which should be replaced by "When" because the previous sentence states that they were safe, and so there is no need to express (b) _____ when describing the possibility of leaving the dome.

出典：LPATE Handbook 2010, p.38

なお、この生徒のエッセイを添削ことができる教師としての能力も、新教育課程に直結している。生徒が受験する証書試験には、エッセイライティングが含まれるのである。受験を控えた生徒に的確な指導ができなくては香港の英語科教員は務まらない。

3. 授業力の試験：Classroom Language Assessment

LPATE の特徴が最もよく出ているのが、Classroom Language Assessment という試験項目であろう。日本では Classroom English として、授業中によく使う表現集があるが、香港の Classroom Language とは、英語科の授業を英語で実施する能力そのものである。この試験は、試験会場ではなく、受験者が所属する学校[9]で実施される。この実際の生徒がいる教室での授業能力試験は、模擬授業ではない生の授業なのである。試験形態は、学校の授業に試験官が出向き、1 コマの授業を参与観察するというものである。形式としては日本の研究授業に相当するであろうが、普通の授業に試験官が来訪し、被試験者は授業の直前に授業内容を説明する時間を与えられるものの、その時間は 5 分と短く、通常の授業に入る。被試験者の約 4 割が再度授業中の英語力確認のため、二度目の参与観察を受けている。その場合、1 回目の試験官とは異なる試験官が異なる日時に、つまり違うクラスの参与観察をすることになる。多くはないが、1 回の参与観察を試験官二人で行うこともある。試験の目的は「教授法」のチェックではなくあくまでも「英語での教科指導力」のチェックであり、授業で用いられるテクニックや、教師としての人格などは評価の対象外となる。

4. LPATE の試験構成全体像

ここまでは、他の国際的英語能力試験にはない教師としての英語能力が問われる部分だけを見てきたが、ここで LPATE 全体の試験構成をみていきたい。まず、試験日程であるが、筆記試験である、Reading（1 時間半）, Listening（1 時間）, Writing（2 時間）は、朝 9 時からお昼を挟んで午後 4 時まで週末 1 日で実施される。Speaking はグループ討論であるため、別途受験生ごとに受験日が設けられ、指定された日時に試験会場に出向く試験である。受験生が日中仕事を持っていることも想定されており、月曜から金曜の夕方 5 時半から 8 時半の間にグループディスカッションも含めた Speaking 試験が課される。そして、実際の授業参与観察によって試験される Classroom Language 試験は、約 5 か月の期間にわたり試験が実施される。なお、Speaking 試験は実施状況の確認と、試験結果の再判定要求が出されたときのためにビデオ録画される。実はこの方法も生徒が中等教育修了時に受験する証書試験と全く同じであり、生徒個々人も試験日時を指定され、スピーキング及びグループディスカッションに臨み、会場試験は再判定に備えてビデオ録画され記録に残される。パフォーマンス評価は判定が難しく、受験者は試験結果に不服がある場合には再評価の要求を出すことが可能な仕組みも出来ている。

次にこれまで論じてきた部分も含めた試験の全体像を確認する。

Reading

試験構成	3 部構成
試験時間	1 時間半
設問数	40-50
設問の種類	短めの自由記述回答、文章補完、穴埋め、図表の完成、多岐選択、T/F 問題
回答形式	回答用紙への記入
問題用文章の長さ・種類	3 種類の文章合計で、1500～2000 words. 文章の種類は物語、議論、説明、対話、解説、など様々な分野から出題。学校教員が専門性開発のためによく読むような文章。
評価法	1 問 1 点から 2 点。点数配分は各設問に明記。

Writing

試験構成	2 部構成
試験時間	2 時間
設問数	第 1 部：1 問、第 2 部：2 問
設問の種類	第 1 部：400 words 前後の文章（説明、物語、解説など）。香港の教員にとって身近な話題（教育的な話題とは限らない）のエッセイ。
回答形式	回答冊子への手書き
設問に使われる文章量	第 1 部：200 words 前後 第 2 部：300 words 前後の生徒の文章
評価法	第 1 部：スケール評価、及び記述式評価により全体評価 第 2 部：各設問 1 から 2 点

Listening

試験構成	3 部ないし 4 部構成
試験時間	1 時間
課題	リスニング及びその回答は 3～4 部構成。各部とも様々な種類の音声（発話）とそれにかかわる設問。各部はそれぞれ異なる分野からの出題。リスニングはそれぞれ 1 回のみの再生。
設問数	30～40 問
設問の種類	短めの記述式回答、文章完成、穴埋め、図表の完成、多岐選択肢、T/F

回答形式	設問・回答冊子への記入
試験問題に使われる文章量	第 1 部に 3～4 種類の文章。全ての音声課題は合計で 30 分程度。発話は、ディスカッション、ディベート、インタビュー、あるいはドキュメンタリーなど、英語教員が授業であるいは自己開発のために使いそうな、様々な分野からの組み合わせ。香港メディアや海外メディアから直接引用あるいは実際のインタビューやディスカッションから作成。
評価法	各設問とも 1～2 点。点数配分は設門に明記。

Speaking

試験構成	2 部構成
試験時間	約 30 分
課題数	第 1 部：2 つの課題、第 2 部：1 つの課題
課題の種類	第 1 部：個人試験、1A は音読　約 3 分。1B は質問に対する口頭回答　約 3 分。第 2 部は 3～4 人のグループディスカッション。教育に関するトピックが与えられる。
設問の種類	口頭設問及び口頭回答
問題に使われる文章量	第 1 部 A：300 words 前後の文章、B：1、2 文の即答。第 2 部は 5、6 文から成る即答回答。
評価法	パフォーマンス評価（スケール評価と記述法）。

Classroom Language

試験形態	授業の参与観察
試験時間	試験は 1 時間の授業。試験官の訪問による参与観察。授業開始前に授業の内容や生徒の学習状況を簡単に説明する時間が与えられる。参与観察する授業は 20 分以上の時間が確保*されるもの。
試験のアレンジ	受験者の 4 割は、異なるクラスで別の試験官による 2 回目の参与観察が実施される。
評価方法	教授法ではなく、授業を実施する言語能力が評価される。教授法やテクニック、個性は評価に含まれない。
配点	パフォーマンス評価（スケール評価と記述法）

＊注記：学校により時間割の組み方に工夫がみられ、1 コマを短くして、1 つの教科を 2 コマ、3 コマ続きにする場合があるため、このような表記になっていると思われる。

以上のように、長丁場にわたる試験である。2021 年 1 月現在、香港の英語科教員（初等・中等学校教員）のための英語能力試験が導入され、20 年が経過しようとしている。かつて広く実施されていたようなミックスコードの授業は耳にすることはなくなった。筆者は、初等、中等の様々なレベル[10]及び種類の異なる科目の授業を数年にわたり見学させていただいている。それは LPATE 導入後 10 年以上経過してからのことであるが、英語科の授業はどの学校でも英語で行われており、レベルが高い。

Ⅲ　参与観察から見る英語科の授業

香港の学校は、国立に相当する官立学校は 5%ほどしかない。約 85%が民営の政府助成校であり、残りの 10%は私立学校に相当する Direct Subsidy Schools (DSS 校) と Private Independent Schools (PIS 校)、そして国際学校に分類される English Schools Foundation Schools (ESF) や日本人学校などの外国人学校、国際学校である。私立学校は香港の教育課程以外の教育課程を提供することもでき、教育局による様々な規制を受けないため、香港の教育制度を語るときにはこれらの学校の一部が除外されることもある。それではここに、政府助成校、DSS 校での英語科授業の一部を紹介したい。

A 校（DSS 校、男子校）

＜後期中等教育 2 年　英語科＞

授業の教材は、2 週間くらい前の新聞記事だった。非常にテンポが速い授業で、パワーポイントを用いた教材提示、問題の所在（なぜ新聞記事になったのか）、キーワードの確認、グループディスカッション、発表と続いた。完全な教員のオリジナル教材である。授業後のミーティングで確認すると、毎回オリジナル教材を準備するという。教材研究に時

間がかかるのではないかと尋ねると、確かに大変だが、休み中（訪問したのは新学期開始早々の９月だった）にストックを用意したとのこと。時には同じ英語科教員内でそれぞれが準備した教材を共有することもあるという。大変レベルの高い授業だった。指導者は若手の教員だったが、ネイティブに引けを取らないきれいな標準英語話者で、英語そのものを教えていたのは、ボキャブラリーチェックの際に表現や教材のコンテクストにおける意味の確認程度で、あとは教材を読み取る力、思考の訓練に重点が置かれていた。

B 校：政府助成校（男女共学）

＜後期中等教育３年英語科：Learning English through Social Issues＞

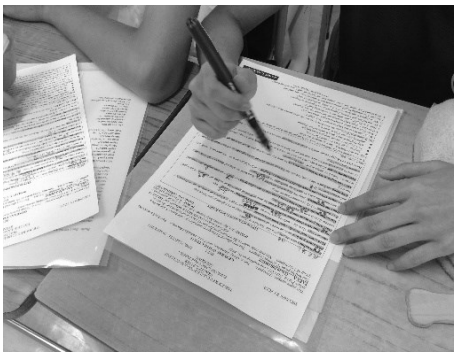
この学校の授業でも新聞記事を利用したオリジナル教材を使っていた。立法会でちょうどまさにその時議論されていたトピックを使い、グループごとに政府役人や議員に役割を割り振り、自分（たちのグループ）が役人・議員だったらどのように議会で応戦するかをグループ内でまとめさせ、最後に発表で締めくくる授業だった。見学した授業はこのトピックで展開された３回目の授業だったが、政治・社会の時事問題を扱う授業であるため、生徒は実際の議論を追っていないと話題についていけないはずである。

自分の意見を書き込むようになっているプリント教材やパワーポイント教材も入念に準備された、レベルの高い授業だった。教員は香港人だが、英語は学識のあるネイティブレベルで発音も標準、しかも早口だった。生徒はそれでもしっかりついていっていた。

A 校、B 校はいわゆる進学校であるが、次に紹介したいのは、社会福祉支援を受ける家庭が多く居住する地域に立地し、生徒の半数近くもが一人親ないし福祉保護を受けているという政府助成校である。創立者は教育機構を立ち上げ複数の学校を設立・経営する教育

篤志家夫妻であり、「人人可教（人は誰でも教育で伸ばすことができる）」を教育機構のモットーにしている。C 校には、進学希望者も就職希望者も混在する。なお、A 校と B 校は共に他の教科も英語が主な教授言語になっている学校だが、C 校は他の教科の多くが広東語を教授言語とする学校である。

C 校：政府助成校　男女共学



＜後期中等１年英語科：Speaking＞

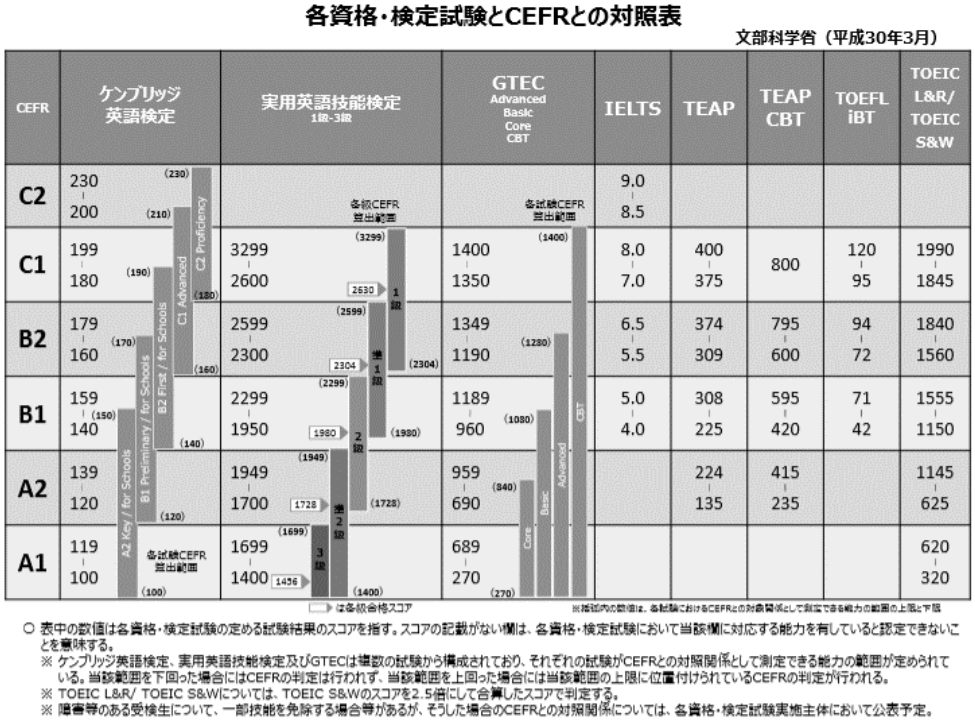
Native English-speaking Teacher (NET)と香港人教師の Team Teaching だったが、ほぼ NET が授業を担当していた。教材は英語の歌のビデオクリップを使い、ボキャブラリービルディングと構文の確認をしていた。プリントはペアワーク及びグループディスカッション用の質問項目である。生徒は自分で語彙の意味を中国語で書き込んでいたが、NET 教員はもちろん全て英語を使用しており、香港人の英語科教員は、授業の最後に課題の確認と卒業年度に受験する証書試験のための個別ライティング指導に関わる指示を英語で出していた。（立っている教員は参与観察している同僚教員）

中等教育段階での英語科テキストはあるが、参与観察した授業では偶然なのか、どこもテキストを使用しておらず、オリジナル教材を準備していた。これは中等教育修了時（実際には 3 年の後半が試験そのものに費やされる）に受験する証書試験での問題が、論述解答を求めるものが少なからずあることにも起因しているのではないかと考えられる。事実を正確に記憶するだけでは回答できない論述形式の問題が、語学だけでなく他教科でも多く設問されているのである。教科と語学を組み合わせた Contents and Language Integrated Learning: CLIL と言われる授業形態が、英語科の中で実施されているように感じられた。

Ⅳ　おわりに

語学教員に求められる英語のレベルを香港の LPATE から考察した。国際的に広く認知されている試験を使わず、敢えて香港の語学科教員用に開発された試験問題は、確かに教員に特化した語学力だけでなく、指導力をも測る試験である。日本は 2013 年から文科省が中学校・高校の現職教員に対し毎年英語力レベル調査を行っている[11]。英語科教員に求められる理想的な英語力を英検準 1 級程度に定めている。最新の 2019 年調査では、高校教員で英検準 1 級レベルに達するのは全国平均で 72%を超えた。中学校教員はまだ 38%台にとどまるが、達成率は急速に高まっている。なお、現在文科省の公表する英語レベルは「英検準 1 級」から、ヨーロッパ言語共通参照枠：CEFR:　Common European Framework of Reference for Languages を用い、B2 で示されるようになった。そして、各種英語試験と CEFR との対照表（図 2）を示し、B2 レベルに相当する様々な試験の級や点数を開示している。

図 2



出典：文部科学省（2018）[12]

CEFR は特定の英語試験のレベルを示すものではなく、あくまでも基準を示すものであるため、客観的な英語力を証明するには、対照表にある B2 に相当するレベルの民間試験に合格あるいは達成すればよいことになる。しかし、Cambridge Exam と IELTS は英国系の試験であり、紙と鉛筆を用いた手書きのエッセイ執筆が含まれる。スピーキングも試験官との 1 対 1 の対面試験である。一方 TOEFL や TOIEC は、アメリカの ETS が開発し実施しているコンピュータを使った主に多岐選択問題であり、ライティングはタイプ入力、スピーキングもパソコン画面に向かって音声の録音をするものである。また、英国系の試験と TOEFL 試験は、英米オーストラリアなどの英語圏の大学入学判定基準に使う目的で開発された試験である一方、TOIEC は主にコミュニケーション能力を測るもので、ビジネス系のボキャブラリーが多い。それぞれ試験の目的と試験スタイルが異なるため、本来正確な比較は困難なはずである。そのため対照表でも各レベルに重なりがあり、試験の種類別に一本の帯にはならないのであろう。

以上を考慮すると、香港の LPATE は英語教員という職業にとって必要不可欠な語学能力を測定する優れた試験と言って過言ではないだろう。また、試験導入以降の新採用教員には試験の合格点に達していることを条件にしているため、新しく教員になる世代は目標を定めて必要な訓練をし、合格点に達したうえで教員になっている。これにより世代交代が進めば教員は全て語学科担当教員として理想とするレベルに達することになる。

日本で今求められているのは、質の高い教員であり、それを熟知しているからこそ文科省は理想的なレベルとして CEFR B2 を掲げている。「理想」にとどめるか、「必要条件」にするかで教員希望者の心構えも随分と異なってくるのではないだろうか。特に香港の LPATE は中等教育レベルの英語科教員だけに限らず、小学校の英語科教員[13]にも求められる試験であることを明記しておきたい。香港は歴史的背景から英語は公用語の一つであるが、生徒の置かれた環境にも左右されるものの、多くの香港人にとって外国語とあまり変わらない。小学校の一般教科の教授言語は広東語であり、英語と大陸の標準中国語が教科として同時に導入される。言語導入期から英語科の教員レベルは格段に高いのである。導入期の指導が大切と言われる外国語・第二言語学習において、質の高い教員が担当することは非常に重要であることは間違いない。

注

---

[1] 原 隆幸（2015）「香港とマカオにおける言語教育」杉野・原編著『言語と格差』 211-228. 明石書店

[2] ごく一部に中国語によるエリート中等教育校もあり、中国語系中等教育の最高学府として香港中文大学があったが、1984 年の学制の統一とともに中文大学も英国の教育課程と同じ 3 年制となった。2012 年の学制の改革で再び 4 年制になっているが、現在教授言語は主に英語である。参考文献：Hui, Philip, & Poon. (2004). 'Higher Education, Imperialism and Colonial Transition' in Bray and Koo Eds.

Education and Society in Hong Kong and Macao: Comparative Perspectives on Continuity and Change. Second Ed. Comparative Education Research Centre, the University of Hong Kong; Kluwer Academic Publishers. 109-126.　及び、中野嘉子（2017）「42. 大学」　吉川・倉田編著『香港を知るための 60 章』246-250. 明石書店

[3] Adamson, B & Li, S. P. (2004). 'Primary and Secondary Schooling' in *Education and Society in Hong Kong and Macao: Comparative Perspectives on Continuity and Change.* Second Ed. Comparative Education Research Centre, the University of Hong Kong; Kluwer Academic Publishers. 35-57.

[4] 約 85%に当たる学校が設立は民間、運営は香港政府からの助成金で賄う Aided School：資助學校（「政府助成校」とする）　という分類にあり、日本の国立に相当する官立学校と政府助成校を公立とみなし、学校全体の約 90%を占める。前者の教員は公務員だが後者の教員は公務員ではない。

[5] 大和洋子（2005）「香港：特別行政区－英語運用能力の個人差が非常に大きい国」本名編著『アジアの最新英語事情』228-242. 大修館書店

[6] 山田美香（2017）「41. 中学・国校の制度改革」吉川・倉田編著『香港を知るための 60 章』241-245. 明石書店

[7] ここでは 2010 年 HKEAA 出版の LPATE Guide book を参照する。

[8] 大和洋子（2014）「香港の大学入学統一試験の改革：新試験（2012）が目指す人材育成」『国立教育政策研究所紀要　第 143 集』117-133.　国立教育政策研究所

[9] LPATE 導入当初は現職学校教員に対して実施されていたので、勤務校での授業そのものが試験になっていたが、これから教員となる場合、授業力を試験する学校はどこになるのか、まだ確認が取れていない。恐らく教育実習校での授業が LPATE の Classroom Language Assessment の対象になると思われる。

[10] 香港の学校はかつてバンディングという学校ランクのグループ分けがされていたが、一連の教育改革により、バンディングは廃止された。しかし、中等教育終了時点で全ての生徒が同じ試験を受験することになったため、学校ごとの成績からランキング付けされる結果になっている。実際には証書試験の結果は公開していないのにも関わらず、民間の教育産業や学校案内サイトが何らかの手段でデータを入手し分析を行っている。

[11] 文部科学省（2020）「令和元年英語教育実施状況調査」概要
https://www.mext.go.jp/content/20200715-mxt_kyoiku01-000008761_2.pdf

[12] https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/__icsFiles/afieldfile/2019/01/15/1402610_1.pdf

[13] 香港は初等教育段階から教科担任制をとる。